

京都・平安京跡左京四条一坊一町

1 所在地 京都市中京区壬生朱雀町

2 調査期間 一九九二年（平四）十一月～一九九三年四月

3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所

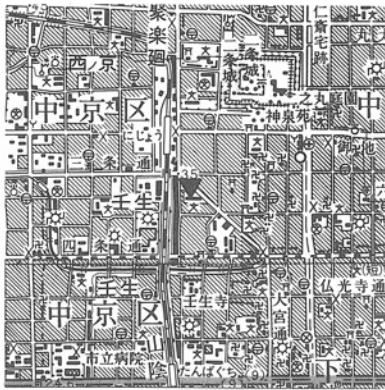
4 調査担当者 鈴木久男・清藤玲子・南孝雄

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平安京左京四条一坊一町に位置し、西は朱雀大路に面する。調査は、小学校の校舎建て替え工事に先立ち行なわれ、工事計画に従い四つの調査区を設定した。



(京都北西部)

確認された遺構は、大きく平安時代の前期と後期に分かれるが、木簡が出土したのは第二、第三トレンチで検出した平安時代前期、九世紀代の遺構からである。九世紀の遺構は更に二期に

分かれる。第一期は九世紀の前半、平安京造営に伴う時期で、一町の南側では六角小路の南北両側溝が検出された。しかし町内の中央には、北東から南西に流れる幅四mの自然流路も存在する。第二期も九世紀の前半であるが、町内の自然流路は埋め立てられ、一町の南西部に園地の池が造られる。池の規模は東西幅三八m、南北幅は不明、深さ〇・四mを測る。池の汀には〇・二m大の石を敷いた州浜を施している。汀の北西部には導水施設も存在する。この園池は九世紀の後半には廃絶する。

遺物は、自然流路、池からそれぞれ出土する。自然流路からは土器類の他、木器も大量に出土する。木器には、漆塗りの刷毛・下駄・ヘラ状木製品（簪木？）等がある。池からも土器類・木器などが出土するが、土器の中には須恵器の壺の体部に「家」と記された墨書土器がある。

8 木簡の釈文・内容

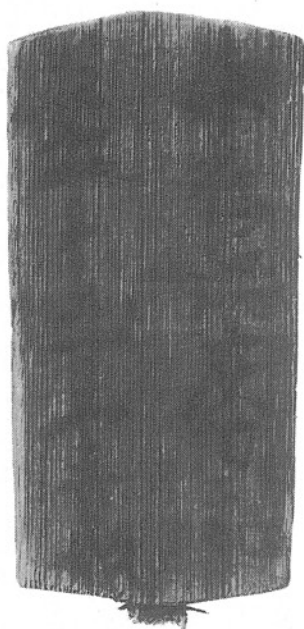
木簡は六点出土している。(1)から(3)が自然流路、(4)から(6)が園地の池からの出土である。

(1) 〇 沙賀我太雲朗 〇 具不祢乃都 ^(久カ)

〇 母 〇 難 〇 〇 〇 〇

(178)×15×7

- (2) [返抄] 納籠カ
 □□□□荒□□□□
 十四年十月十日□□ 247×32×3 011
- (3) □□□□□□□□□□三升斗
 ×月廿六日史生□□人麻×
 (95+199)×(25)×4 081
- (4) ・朱雀院炭日記
 □□十一年五月十三日始
 ・朱雀院炭日記
 □□十一年五月十三日始
 (80)×38×6 061
- (5) [家カ] 家 家
 (90)×(22)×2 051
- (6) ・□□□
 (29)×17×3 039
- (1) の形状は〇一型式に似るが、下方を二又に削り、人形に似た形となっている。裏面二字目は示偏、七字目はしんによるの文字である。(5)は、やや大型の題籤で、軸部は欠損する。二行目の第一字は不明であるが、共伴する土器から「十一年」は承和十一年（八四



(4) 表

四)、貞観十一年（八六九）が考えられる。「炭日記」がどのような文書であったのか現在知り得ないが、朱雀院は、今回の調査地とは、朱雀大路を挟んで西側に存在した累代の後院であり、当地に朱雀院との関係の深い施設が存在したことを示唆している。

木簡の釈文については、奈良国立文化財研究所の綾村宏、館野和己、渡辺晃宏氏のご教示を得た。

9 関係文献

(財)京都市埋蔵文化財研究所『平成四年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（一九九五年）

（南 孝雄）